

2020. 6. 21 第三主日父の日礼拝

ルカ 15:11-24 「父の大きな愛」

## 聖書

- 11 イエスはまた、こう話された。「ある人に二人の息子がいた。
- 12 弟のほうが父に、『お父さん、財産のうち私がいただく分を下さい』と言った。それで、父は財産を二人に分けてやった。
- 13 それから何日もしないうちに、弟息子は、すべてのものをまとめて遠い国に旅立った。そして、そこで放蕩して、財産を湯水のように使ってしまった。
- 14 何もかも使い果たした後、その地方全体に激しい飢饉が起こり、彼は食べることに困り始めた。
- 15 それで、その地方に住むある人のところに身を寄せたところ、その人は彼を畑に送って、豚の世話をさせた。
- 16 彼は、豚が食べているいなご豆で腹を満たしたいほどだったが、だれも彼に与えてはくれなかった。
- 17 しかし、彼は我に返って言った。『父のところには、パンのあり余っている雇い人が、なんと大勢いることか。それなのに、私はここで飢え死にしようとしている。
- 18 立って、父のところに行こう。そしてこう言おう。「お父さん。私は天に対して罪を犯し、あなたの前に罪ある者です。
- 19 もう、息子と呼ばれる資格はありません。雇い人の一人にしてください。』
- 20 こうして彼は立ち上がって、自分の父のもとへ向かった。ところが、まだ家までは遠かったのに、父親は彼を見つけて、かわいそうに思い、駆け寄って彼の首を抱き、口づけした。
- 21 息子は父に言った。『お父さん。私は天に対して罪を犯し、あなたの前に罪ある者です。もう、息子と呼ばれる資格はありません。』
- 22 ところが父親は、しもべたちに言った。『急いで一番良い衣を持って来て、この子に着せなさい。手に指輪をはめ、足に履き物をはかせなさい。』

23 そして肥えた子牛を引いて来て屠りなさい。食べて祝おう。

24 この息子は、死んでいたのに生き返り、いなくなっていたのに見つかったのだから。』こうして彼らは祝宴を始めた。

## はじめに

今日は父の日です。父親の立場におられる皆さんに神さまの祝福がありますようにお祈りします。ずいぶん前ですが「父の日に自分で丸をつけておく」という川柳がありました。忘れられがちな父の日、「父の日」は「母の日」にとってつけたような印象を持っている方は多いのではないのでしょうか。歴史的にも母の日を受けて父の日もという流れですから、後付けの印象は拭えないですね。とはいえ、毎日家族のために祈りと労を捧げてくれるお父さんに普段表せない思いをことばや贈り物で表すことには意味があると思いますので、善き一日になりますようにお祈りします。

## 1. ある女性の話

ある心を病んだ女性がこんな証を残しています。彼女の両親は不仲の結果、父が家を出てしまいます。父に捨てられたとの思いが彼女の心を深く傷つけ父を憎みます。そして精神障がいを発症し、そんな中母は突然亡くなります。彼女は死以外に願うものはなにもない日々の中で神さまに出会います。神さまの愛を受けてからも、彼女にはその後 14 年間に 10 回の躁（そう）状態が出現し、そのたびに野獣のように怒りまくることを繰り返しました。しかしその間ずっと側に付いてくれたのが父でした。その父がのちに救われて洗礼を受け、不思議な神さまの御業に驚くべき恵みがあると証しています。

不完全で不器用で、家族にうまく自分の気持ちを伝えることができず、かえって悲しみを与えてしまうような人間の父でさえも、心病む我が子を見捨てることはできなかったのです。それが父というものではないのでしょうか。今日開きましたルカ 15 章のお話は、放蕩息子という題で親しまれている箇所です。ここに描かれた父の姿は、神さまのことを表しているのですが、放蕩

三昧をして帰ってくる息子を待つ父の姿から、父の大きな愛に触れたいと思います。父親である皆さんに、神さまからの大きな愛が与えられて、もっと家族を愛する人に変えられていくことを願わされます。

## 2. 父の下を去った息子

放蕩息子の話は、イエスさまが当時の宗教家たち（パリサイ人、律法学者）にされた3つのたとえ話の3番目に出て来るお話です（詳しくはルカ15章をご覧ください）。

ある人に二人の息子がいました。弟息子は父に「財産のうち私がいただく分をください。」（12節）といい、「父は財産を二人に分けてやった。」（12節）のです。弟は財産の分け前をもらおうと遠い国に旅立ちます。そこで財産を湯水のように使い、全部使い果たしてしまいました。悪いことに、国に大飢饉がやって来ました。「飢饉さえ来なければ」「こんなはずじゃなかった」と思ったでしょうね。彼は食べることに困り始めたので、ある人の所に身を寄せたところ、その人は彼を畑に送り、豚の世話をさせたのです。彼は豚の餌で空腹を満たしたいほど落ちぶれてしまいました。豚の世話でも仕事を与えられて良かったと思うかもしれませんが、豚はユダヤ人が最も嫌った不浄の動物で、その世話をするという事は彼のプライドは完全に地に落ちたということです。

そのとき、かつて父の下にいたときの様子が彼の脳裏をかすめました。雇い人ですら食べるものに事欠かないのに、今の自分はどうかろう…。弟息子は我に返って、自分は大きな間違いをしてしまったと気づいたのです。父に対して罪を犯したどうしようもない息子だということに目が開かれ、もはや息子だなどと権利を主張できるような者ではないけれど、父の下に帰ろうと決心します。弟の決断は自分の過ちを認め、父の下に帰ろうとする勇氣あるものです。この弟息子の決断をずっと待ち続け、彼が帰って来たときの父の姿が今日皆さんと分かち合いたい一番のことなのです。

### 3. 父の大きな愛

父親がとった行動は次の二つでした。「こうして彼は立ち上がって、自分の父のもとへ向かった。ところが、まだ家までは遠かったのに、父親は彼を見つけて、かわいそうに思い、駆け寄って彼の首を抱き、口づけした。」(20 節)、  
『『急いで一番良い衣を持って来て、この子に着せなさい。手に指輪をはめ、足に履き物をはかせなさい。そして肥えた子牛を引いて来て屠りなさい。食べて祝おう。この息子は、死んでいたのに生き返り、いなくなっていたのに見つかったのだから。』こうして彼らは祝宴を始めた』(22-24 節)。父親は弟息子を赦し受け入れただけでなく、祝宴まで催し帰ってきたことをみんなで喜びました。

この父親の姿には、何があっても信じ続ける愛、赦し受け入れる愛が表されています。父は弟息子が家を出た日以来、一日たりとも息子のことを忘れたことはなかったでしょう。息子の身を案じ、いつか必ず帰って来ると待ち続けていたのです。父は遠くに帰って来る息子の姿を見たとき、駆け寄って彼の首を抱き口づけして止みませんでした(20 節欄外: 何度も口づけした)。いかに父親が弟息子の帰りを待ちわびていたかがよくわかります。必ず帰って来ると信じて待つことは、忍耐のいることです。愛なくしてできることはありません。聖書は「愛は…すべてを耐え、すべてを信じ、すべてを望み、すべてを忍びます」(I コリント 13:7) と言います。父が持っていたものは、どんなときにも信じて待つ愛なのです。

そして父は帰って来た息子に対して、一番良い衣を着せ、指輪をはめ靴を履かせ、祝宴を開きました。これは弟息子にとっては予想外のことでした。なぜなら彼は父の下に帰るときこのように言おうと決めていたのです。「私はあなたの前に罪ある者です。もう、息子と呼ばれる資格はありません。雇い人の一人にしてください。」(18, 19 節) と。しかし父は雇い人どころか、“お前は雇い人ではない。私の息子だ” と言ってすべてを赦し迎え入れました。

息子に用意した一番良い衣、指輪、靴はそのどれもが最愛の息子であることを象徴するものだったのです。この父親の姿の中からは、怒り、責め、罰などの否定的な感情が微塵も感じられません。皆さんは違うと思いますが、私は自分の父に対して怖い印象を持っていました。事実、私自身のものの言い方も家庭の中ではそのように映っていることを聞かされる時、ここに出て来る父の姿と真逆であることを示されます。私も一人の父親として、放蕩息子を迎える父の姿を私自身のものにしたいと心から願います。もし私が変われば、私を取り巻く家庭も世界も変わっていくでしょう。父親に、無条件で赦し、受け入れる愛があったなら、その父親に守られている家族は幸せです。そのような幸いな家庭を私たちの中から作り出して行きましょう。

## まとめ

この父親と息子の関係は、私たちを創造された父なる神さまと私たち人間との関係を指し示すもので、ここに聖書の愛と赦しの真理が表されています。

弟息子が本来の自分の居場所を見失い、父親の下を出て行ったように、私たち人間は、神さまの手から離れて自由を得ようとしてしました。しかし、そこで得たものは一時的な満たしだけで、本当の満足や喜びはなかったのです。私たちの生活の中で、自分の居場所がない、満足がない、平安がないのは、神さまの手から離れて生きているからです。神さまはその私たちを忍耐して、待ってくださいます。いつか、必ず帰ってくると。帰ってくるための道も用意して。その道がイエス・キリストです。

「わたし（イエス・キリスト）が道であり、真理であり、いのちなのです」（ヨハネ 14：6）。イエス・キリストの十字架は、私たちが神さまの下に帰るための道なのです。

父の日に思うことは、父親にこそまず神さまの愛が必要だということです。放蕩息子の話に出てくる父親のようになりたいならば、父親自身が自分を息子の立場に置いて迎えられる経験をする必要があるのです。なぜなら、自分が赦された経験をした者が人を赦すことができるからです。自分が愛され

たことを経験した者しか人を愛することができないからです。父親である皆さんが、私は神さまの手から離れてしまったものであり、自分が赦され愛されなければならない者であることを知ることができますように。神さまの下で赦しと愛を頂いて、それをもって家族を愛する父親とされたく願います。すべての父親である皆さんに神さまの祝福が豊かに注がれますようにお祈りします。